

## ヒストグラムとは

ヒストグラムとは、光の幅（露出または露光）の分布を表わすグラフです。左右の幅には、左端から外れると黒くつぶれ、右端から外れると白飛びになる光の範囲で、上に山が多い場合はピクセル（画素）の量になります。撮影した画像がこの幅いっぱい、また山が大きい場合は、最も適した露出をしたことになります。しかし、被写体や撮影条件などによっては、必ずしもそうはいきません。気をつけなくてはならないのは、白飛びにならないように露出することです。最近のカメラには、リアルタイム（撮影しながらヒストグラムを見れる方式）で表示できる機種が増えてきました。

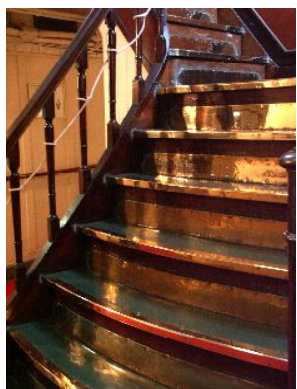


左の写真は、暗い船内の写真です。うまく露出したつもりでしたが、ヒストグラムが左に大きくズレています。（図①）

レタッチにおいて、このヒストグラムの右の△スライダーをヒストグラムの山の右端にスライドすると下の写真のように写真が明るくなります。（図②）



図②の操作をすることによって、ヒストグラムの幅が右端にも伸び、露出領域が広がったのが分かります。（図③）



レタッチにおいて、この操作のことを「レベル補正」と呼んでいます。この写真の場合は、黒側を基調としたものです。また、中間調は真ん中の▲スライダーを左右に動かして調整します。アンダー側は、左の▲スライダーを動かして調整します。

これが露出補正の基本で、撮影時点からレタッチ操作まで共通しています。

ヒストグラムといっても、チャンネルのところに表示されているように「RGB」「レッド」「グリーン」「ブルー」「輝度」「カラー」とそれぞれの表示をし、補正することができます。一般的には、「RGB」での補正で十分ですが、ホワイトバランスの大幅な狂いや色かぶりなどを起こしている場合は、それぞれの色で補正する必要があります。

さて、むずかしい話しはその辺にして、撮影するとき、または撮影後、「ヒストグラム」を確認し、撮影された画像の露出をチェックすることができるのは、デジタルカメラの特徴です。画像を拡大し、ブレがないか？ピンとは合っているか？露出はこれでよかったか？をチェックし、そのまま保存するか？それとも撮り直すか？この操作をすることによって、無駄な写真を残す必要がなくなったわけです。

最初は、むずかしく感じる機能ですが、慣れてくるとこんなに便利な機能はありません。デジタルカメラは、白飛びに弱く、データが残りません。特に白いものや反射しているものを撮影するときは、このヒストグラムをやや左側（黒い方）になるように露出して撮影します。できあがりはやや暗い写真になりますが、レタッチで白飛びにならない程度に補正して完成させます。